

内子特別栽培農作物等認証の 完熟トマトを使った加工品の 製造販売で農家を元気に！

＝「トマトケチャップ・トマトソース」、「トマトアイス」の製造販売への取り組み＝

支援機関：大洲商工会議所

支援内容：経営力の向上支援

支援区分：農商工連携

株式会社内子フレッシュパークからり

Information

【企業概要】

社名：株式会社内子フレッシュパークからり
代表者：代表取締役社長 高本 厚美
業種：他に分類されない食品製造業
所在地：愛媛県喜多郡内子町内子2452番地
資本金：70,000,000円
設立：平成9年4月1日
従業員：48人



◆ 当社設立の背景、動機

(株)内子フレッシュパークからりは、内子町内産農産物や、パン・燻製食品・シャーベットなどの加工食品を所内にある直営レストランと有機的な連携を図りながら、当社が運営している直売所を通じて販売をしている。直売所の利用者は、地区内住民はもちろんのこと、遠くは松山市や宇和島市などから年間70万人を超え、うち70%はリピーターの方々の利用となっている。

現在の直売所における特産品等の販売比率は野菜類が約38%、果実類が約27%、加工食品等が約27%、その他が約8%となっており、昨今は特に持ち帰り用のギフト商品の要望が多くなってきた。そこで、直売所での販売以外に販路を拡大する為にも加工品販売を強化すべく、平成19年11

月に農林水産物処理加工施設を新設した。

一方農業生産者においては生産物の付加価値向上の取り組みとして内子町特別栽培農作物等認証※の完熟トマトの栽培を始めており、今回その完熟トマトを使用し新規加工商品の開発に着手した。「トマトケチャップ・トマトソース」、「トマトアイス」について直売所にてテスト販売をした結果高い評価が得られ、今回商品化、事業化を決意した。

今後は販路開拓を積極的にすすめ、デパート、専門店、飲食店等の業務向け、ホームページによるネット市場への進出も視野にしている。販路開拓に当たっては、地域ブランドとして安心・安全・新鮮をテーマに農産物の特性を最大限に活

用し、量販市場ではなく小さなマーケットではありますが差別化、優位性を発揮することで確実な

需要が見込める販路の開拓を目指している。

※ 内子町特別栽培農作物等認証:国の表示ガイドライン(特別栽培農産物等認証制度)に沿って内子町が、農作物の栽培における内子町栽培基準から化学合成農薬及び化学肥料を30～50%以上削減して育成した安全性の高い農産物に対し認証を付与するもの

◆ 事業概要

内子町内の農家が生産する内子町特別栽培農産物等認証の完熟トマトを使って、(株)内子フレッシュパークからりが「トマトケチャ

ップ・トマトソース」「トマトアイス」等の新商品開発を実施する。



特産品トマトを活用したギフト用ケチャップ



特産品トマトを活用したアイス

加工を担当する(株)内子フレッシュパークからりと農家が連携し、定期的話し合いの場を設けてトマトの定植から収穫、品質の均一化、減農薬対策などを協議している。

加工生産においては最新の設備を活用した生産性並びに効率化の向上によって、コスト削減に努め市場における競争力の強化につなげていく。販路開拓においては積極的な展示会や商談会への出展により商品特性の周知性を高め、「内子からり」ブランドの普及と直販

体制確立のための通信ネットワークの構築を図っていく。

これらの取組みによって特産品であるトマトの加工品として付加価値を高めることによって、農家と(株)内子フレッシュパークからり双方の売上高、付加価値額の向上につなげることを目標としている。



平成19年11月完成の加工場外観



衛生的で機能的な加工場内

◆ 拠点の具体的な支援内容

① ビジネスプランのブラッシュアップ



最初に訪問した際に、代表取締役の高本氏と担当者の沖野氏から、内子産の完熟トマトを使った「トマトケチャップ・トマトソース」、「トマトアイス」に対する熱い想いを聴かせていただいた。今回の事業計画を何とか軌道に乗せ、成功に結びつけることによって農家の所得向上と(株)内子フレッシュパークからりの経営基盤の強化につなげたいという想いが伝わってきた。しかし、事業計画を実現させるには更なる検討が必要であった。

【主な検討課題】

Point

- 事業者と農家双方の経営計画・売上計画・資金計画を明確にする。
- 市場ニーズ・市場規模の調査および競合する類似商品との相違点・優位性を明確にする。
- 販路開拓の手法に関する検討。
- その他各種調査や専門家のコンサルタントに関する時期や費用についての検討。

② 農商工等連携事業の認定申請のサポート



今回の事業内容は2008年度からスタートした中小企業者と農林漁業者が連携し、相互の経営資源を活用して、事業者にとって新商品や新サービスを生み出すこと、工夫を凝らした取り組みを展開することで、それぞれにとって経営改善が見込まれることといった「農商工連携事業」にマッチするものであったため、農商工等連携事業の認定申請を行うこととなり、申請書の作成に関してサポートを行った。

③ フォローアップ

代表取締役の高本氏と実務担当者の沖野氏の熱意と努力が実り、農商工等連携事業の認定を受けることが出来た。今後は、委員会のメンバーとして事業推進のための協議・検討に積極的にかかわっていく予定である。

◆ 拠点を利用した事業者の声

農商工等連携事業に取り組んでよかったことは、農家も会社も一体となって頑張ろうという機運や連帯感が生まれたことです。

以前の、農家はただ作り出荷するだけ、会社は販売するだけから、お客様のためにいい農産物を作り、いい商品を提供しようという意識改革が芽生えてきました。これは本当にすばらしいことだと思っています。

また「農商工等連携事業計画に係る認定申請書」を国に提出し採択され事業がスタートできたのは、各支援機関や行政の職員や専門家の皆様方のサポートのおかげだと、とても感謝して

います。

トマトをきっかけとしてスタートしましたが、今後は、たくさんの農家が参加できる体制作りを行い皆様に喜んでいただける様々な農産加工品を販売していきたいと思っています。



代表取締役社長
高本 厚美氏

Staff voice 

◆ 支援に携わったスタッフの声

人々をつなぐ交流の場、道の駅「内子フレッシュパークからり」は内子町内の農家で採れた新鮮野菜や果実、手作りお菓子などが人気で、いつも県内外からのお客様で賑わっています。

その数、年間70万人。売上は年間7億円。その地域活性化に繋がる経営手法は全国から熱い視線を集め、視察研修の申し込みが後を絶たないそうです。そんな情報から想像する「内子フレッシュパークからり」の姿は成熟した大人のイメージでした。

しかし、今回私がお会いした高本社長と沖野部長代理のお二人から聞く言葉は、夢を求めて困難な道を切り拓き新しいものに挑戦する「開拓者」そのものでした。14年前、自治体からはなれ、「出荷者協議会」として立ち上がったときの目標が、「販売だけでなく、加工業も成功させる」というものであったそうです。その目標を忘れることなく、その夢の実現に向けて一步一步着実に努力されている姿に感銘を覚えました。成功に胡座をかくことなく次なる高みに向けて歩みを止めないその姿勢は見習うべきものがあります。今回の「農商工連

携事業」の認定を受けたことは、壮大な夢の実現にむけての緒についたにすぎません。今後、解決しなければならない問題や課題が多々発生すると思いますが、高本社長をはじめ関係者の方々の熱意と創意工夫で必ずクリアされることと思います。私も引き続き出来る限りのフォローアップでお手伝いさせていただきます。

「内子フレッシュパークからり」は何度も訪れるリピーター＝「からりファン」がたくさんいらっしゃるそうです。私も今回の支援を通じてすっかり「からりファン」になってしまいました。



応援コーディネーター
岡本 恭英